

早稲田大学 文化構想学部 英語 講評

〔総合分析〕

出題形式	マーク・記述併用
試験時間	90分
特徴・その他	大問5題はサンプル問題と同じ。量はサンプル問題よりやや少ないか。また、レベルはサンプル問題よりかなり易化したようだ。かなり簡単だったと思った受験生が多かったのではないだろうか。全体として絶対量は多いので、速度勝負の問題という印象だ。

〔大問別講評〕

番号	出題内容	コメント	難易度
I	英文読解	空所補充問題のみである。当然、内容から正解を導くのが基本であるが、熟語などの慣用句を含めた形から解くのも重要である。たとえば、go so far as to (do)「～までもする」、the relationship of A to B「AのBとの関係」、be exposed to「～にさらされる」、on the part of「～の側で」、the case「事実」、control over「～に対する制御」、be inclined towards「～に心が向いている」などである。また、andで解く問題も2題あった。	やや易
II	英文読解	リードの部分のある内容一致問題、または段落要旨問題である。(A)～(C)と3つの英文から成り立っているが、3つとも時事問題でしかも社会科学系統のテーマであったことは驚きだ。やはり文学部との差別化を目指しているのであろうか。ところで、英文自体は読みやすく、選択肢も紛れはないと言っていいと思う。選択肢の(a)～(d)の頭の部分がアルファベット順に並んでいるのは、早稲田によくあるパターンで特筆に値しないかもしれないが、覚えておくといい。本文の該当箇所と正解選択肢の一例を挙げておこう。 ～ allow <u>journalists</u> to report the war with greater realism <u>Reporters</u> were able to give more vivid accounts.	やや易
III	英文読解	脱文挿入問題のみである。政治経済学部の脱文挿入問題と違い、接続詞や代名詞などの大きな手がかりとなるものは比較的少ないのが特徴か。サンプル問題でもそうであった。しいて言えば、(b) these、(d) these、(f) It、それに本文では <u>25</u> の後ろの this、 <u>28</u> の後ろの In particular くらいであろうか。もっと高度なテクニックを使うのなら、 <u>26</u> の後ろの by living together のような副詞句がなぜ文頭にあるのかを考えたりするのも、的確に正解を導くには必要かもしれない。	標準

番号	出題内容	コメント	難易度
IV	会話文	はっきり言ってかなりやさしい問題。このレベルの問題なら、これといった対策はいらないであろう。会話独特の表現も狙われていなかった。	易
V	要約	英文の文章をひとつの英文に要約させる問題。解答欄は4行であったということなので、30語前後の英文にするようだ。また、ひとつの段落で構成されているので、段落要旨的なまとめ方をするわけではない。今回の問題で言えば、第1文に <b>but</b> があるのでその後を押さえる。その後に長い具体例となるので無視する。最終文で <b>these three authors all</b> ～とまとめに入っているので、ここを押さえる。よく読んでみると、最初と最後の文は同じようなことを言っている。あとは英語の問題である。英文はやや易、要約問題という意味でやや難。	やや難 (英文はやや易)

〔総合コメント〕

文化構想学部の問題は、総合的に見てかなり簡単だと言える。合格最低点は、おそらく7割を超えるであろう。高得点の争いだ。その中で何をやっていくべきか？ ひとつは時間配分であろう。量がかなり多いのは確かである。慎重に読むことは重要といえば重要だが、時間が足りなくなる可能性がある。次に脱文挿入問題の出来である。この問題を得意とできるようにしたい。最後に配点が8点の要約問題である。この種の問題は得意、不得意がはっきり出る。ここを得意とするのが合格への近道であろう。最後に大胆に言わせてもらえれば、次年度は必ず難化すると予想する。皆さんはどう思われるであろうか？